日本宮中公演芸術と文化コンテンツ

淑明女子大学校　助教授　李知宣

伝統社会において最高の演奏家が担う公演は、高い水準と品のある公演芸術の精髄と言える。また、宮中公演芸術は一国を代表する公演文化としての価値がある。しかし、宮中公演の価値や意味を強調する前に、これを今日の大衆にどのようにアピールすべきかについて、体系的で根本的なアプローチが必要である。なぜならば、伝統社会で行われた宮中公演の目的や場所、それを担った階級は現代社会のそれらとは明らかに異なり、伝統そのままの公演スタイルでは現代人に需要されにくい可能性もあるからである。そこで、宮中という空間、過去の記録に埋もれていた伝統を取り出し、大衆が共有できるような宮中公演芸術のコンテンツ開発が要求されるのである。

今日、文化コンテンツ産業は国の経済的な波及が大きな高付加価値産業として注目を浴びている。文化コンテンツにおいてもっとも重要な要素は、まず優れた材料、つまり源泉資料の発掘である。優れた源泉資料に基づいてこそ優れた商品ができあがり、それがまた様々な形で活用できるからである。このような観点から見れば、宮中公演芸術は一国の公演芸術の頂点であり、ほかの民族や国とは区別される固有性という側面で優秀な競争力を持つため、他に類を見ない優れた文化コンテンツの源泉ソースになる。

日本は自国の文化によるコンテンツ産業を育成するために多様な政策を進めてきているが、その一環として 2004 年「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」（コンテンツ振興法）を発表した。この法律は、日本のコンテンツが国民生活の向上に寄与し、海外における日本の文化等に対する理解を増進させ、有力な産業として成立、成長していくことを目指し、関係府省や民間が一体になりコンテンツの創造、保護及び活用の促進のために制定したものである。これに関連して、日本の映画や音楽、漫画、アニメなどの大衆文化のみならず、伝統文化コンテンツ産業の育成、伝統産業と新しい産業のコラボレーションなど、伝統文化を活用したコンテンツ開発も進めている。

このような背景から、本発表では日本の宮中芸術である「雅楽」に焦点を当てて、伝統的な公演スタイルや現代的な変容、活用様相について考察し、文化コンテンツとしての可能性を探ろうとする。まず、雅楽の正統的な演奏スタイルや特徴について簡単に言及した後、日本の国立劇場が行ってきている雅楽コンテンツ開発の面々、新しく試みられている現代雅楽コンテンツの事例、そして、映画・ドラマ・小説などのメディアとの結合を通したコンテンツ開発や活用の様相について考察し、これらを踏まえて日本の宮中公演芸術が現代の文化コンテンツとしてどのような可能性があるかについて検討したいと思う。